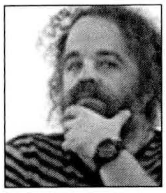
解　説

三谷　惠子



訳出した二つの短編「電話帳」（Telefonski imenik）と「お嬢さん」（Hanumica）は、ミリェンコ・イェルゴヴィッチの『サラエヴォ・マールボロ』（Srajevski Marlboro, 一九九四年）と『歴史読本2』（Historijska čitanka 2, 二〇〇四年）からのものである。

作者イェルゴヴィッチは、一九六四年サラエヴォ生まれのクロアチア系ボスニア人作家。一九九三年まで戦時下のサラエヴォに暮らしていたが、その後クロアチアに移住した。現在もクロアチアのザグレブ近郊で作家として、またジャーナリストとして、積極的に活動している。最近の作品には、セルビアの作家バサラとの対談式エッセイ『もうひとつの輪』（二〇一五年）や一九一四年のサラエヴォを舞台にした小説『ドボシの夜』（二〇一五年）などがある。イェルゴヴィッチとその作品等についてより詳しくは、中東現代文学研究会編『中東現代文学選2012』（二〇一三年）四五ページを参照されたい。

「ハヌミツァ」は、この作品が収録された短編集『サラエヴォ・マールボロ』全体がそうであるように、日常の中に戦争という異常が入り込んだサラエヴォの生活と、そこに浮かび上がる人間の心の機微を描いた作品である。ホームレスのような生活をしていた男チポがとつぜん《金持ちのおばさん》から遺産ならぬアパートを譲り受け、そこで一七歳の娘と奇妙な同居生活を始める。自分とはまったく別の、ずっと上質な、本来なら自分とは接点もあるはずのない世界から来た娘は、チポにとって天からの贈り物のように見えた。彼女と係わりたい、親しくなりたい。けれどいったん係わりを持てば、その先には、愛する人を失うかもしれないという恐怖が待っている。チポは過去のトラウマから娘に近づくことができず、自分の周囲に対人防壁を作る。けれど娘が砲撃を受けて死にゆく中、その心の叫びが噴き出すのだった。表題「お嬢さん」の原語ハヌミツァ（Hanumica 令嬢）はオスマン語からの借用語である。

もう一つの作品「電話帳」は、イェルゴヴィッチの短編集『歴史読本2』に収録された一編。『歴史読本』はもともと、サラエヴォの独立系新聞『DANI（日々）』のコラムとして連載されたエッセイ風の短編を集めたもので、その第一集が二〇〇〇年に『歴史読本1』として出版された。タイトルが示唆するように、いずれも作家が、自分の育ったユーゴ時代やその後のボスニア戦争、そして今のサラエヴォのさまざまに思いを馳せながら綴った短編である。コラムの連載はこの第一集刊行後もしばらく続き、これをまとめたのが『歴史読本2』となった。

「電話帳」には、いつまでたっても何も変わらない――故人となった人の名義変更など決して起こらない――ユーゴ時代のサラエヴォが、シニカルにかつノスタルジックに描かれる。非効率的で、前近代的とさえいる共産主義時代、誰も社会的正義などといったことは考えようともしなかった時代、しかしイェルゴヴィッチの語りを通して見ると、皮肉なことにその時代は、故人の名を守り、遠くに逝った人を生者であるかのように扱う、古い精神文化の継承であったかのようにさえ見えてくる。

『歴史読本2』に収録された別の短編「指輪」では、自分の祖母の死の思い出を、一九八四年のサッカーワールドカップ・メキシコ大会で皆が夢中になっていたサラエヴォと重ね合わせて描く。長編であれ短編であれ、社会の表面で起きていること、歴史の記憶、そしてそこに暮らす人たちの内面を繋ぎながらボスニアの土壌を描くイェルゴヴィッチの語りの巧みさは、旧ユーゴ圏出身の現役作家では群を抜いている。